

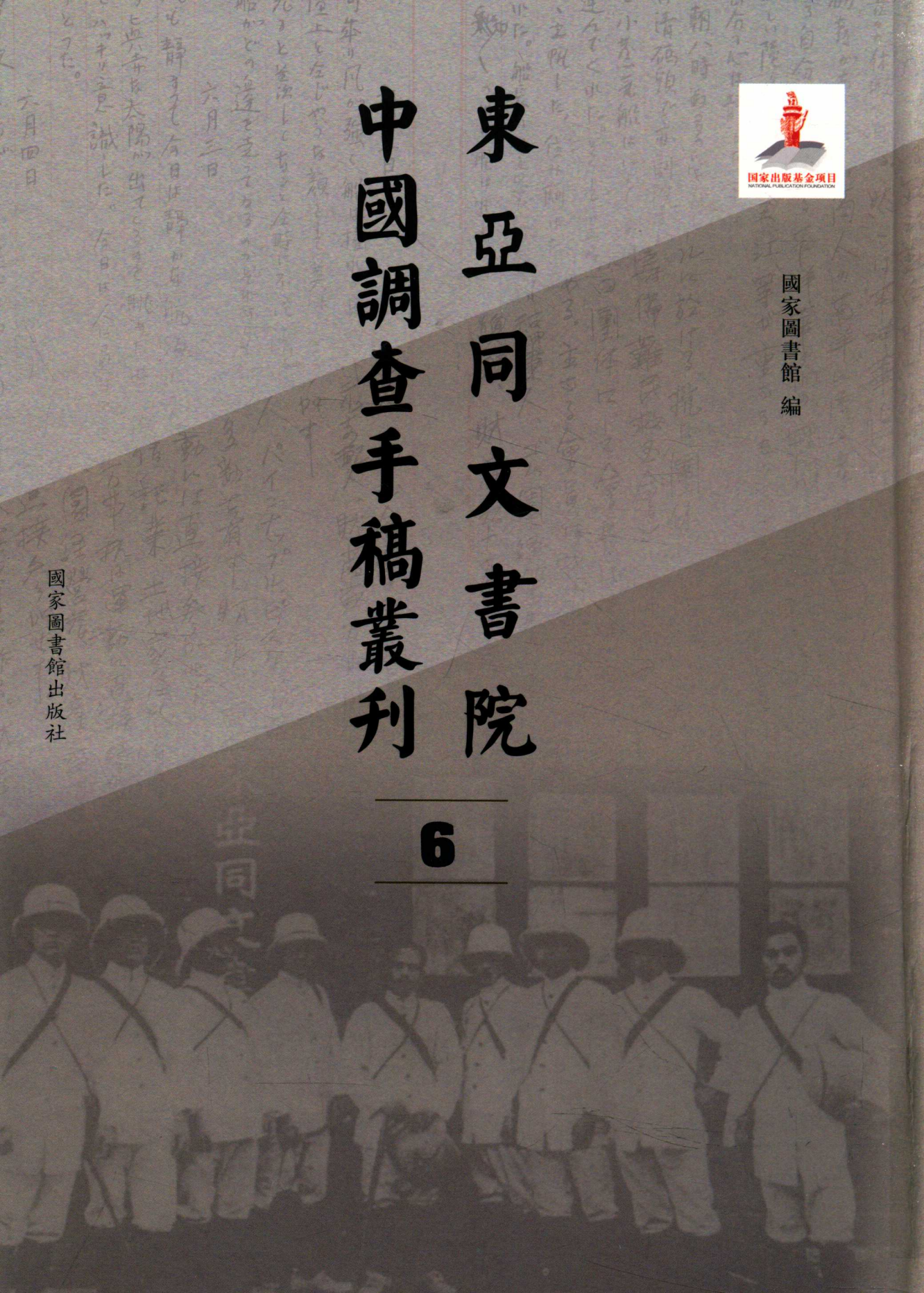


國家圖書館編

東亞同文書院 中國調查手稿叢刊

6

國家圖書館出版社



國家圖書館編

東亞同文書院
中國調查手稿叢刊

6

國家圖書館出版社

第六冊目錄

昭和二年（一九二七）旅行日誌（第二十四期生）

小林榮	第八卷第九編	一
趙桂顯	第八卷第十編	八五
竹味武雄	第八卷第十一編	一六一
浦上尚之	第八卷第十二編	二三五
馬淵悅男	第八卷第十三編	二六一
横山安起	第九卷第一編	三〇一
香川英史	第九卷第二編	三八五
深堀健一郎	第九卷第三編	四六一
和多田介英	第九卷第四編	五六一

昭和二年度

旅行日誌

南支沿岸經濟調查班

小林 栄

1.
緒言

拘て旅行日誌をんて新式ばつた事をいさ
書しとなると何を書いていゝものやうつゝい
まごつかざるを得ぬ。そゝでするいかも知れ
ないが旅行日誌を平凡に解釋して普通
の日誌らしく日を追ふて書しことにする。

旅行する地理的氣圍が廣い割合にその日
數が少く殆んど朝から晩寝るまで忙しいん
だからゆつしり日誌を書し暇もない。然し
我々見た様に銀中旅行の多かつた者は他に
比し暇はあつた筈だが情急い故に銀に弱
い俺にはその用も何にもなかりなかつた。寧ろ幸
い位なやつた。それではこの日誌が十分でないのは

自分で判つて居るんだが頭が悪い俺に對つて
今となつては何ともする事は出来ん。まさか人
のを借りて見る款にも行かず仕方なくそ
の日くの寸記に依り書いてまあ我慢
して貰ふ事にする。

昭和二年師走念日

南支品岸調査班

小林

宗祐

五回 木雨

六日 木雨。前七時起床。朝食カセシに荷物院子に
出でて自動車来るを待つ。何故かしう気
が落ち着かず身内がそくする。例年の道
り記念撮影をなし諸先生方に挨拶し自
動車に依り午前八時高嶺拍手の音声ト
送られて校門敷大阪高船碼頭着。時向
の余松あるに任せ船中食糧買込の爲虹口
コーケット附近まで引き道す。僕は恥し下り
船に非常に乗過るの経験より見れば船中
にては殆んど食慾進まざる爲。果物葡萄面
の用意を存す。正十一時馬場、賀来久保田
熊野の諸先生方々が多数教学生に見送られ

大旅行歌の鉄剣を磨け乍ら絶大なる希望
を抱ける我々同志拾ねるの乗たる大阪商船
盛京丸は雨中を除々に解纜しかして撞
水の大旅行の幕は切つて流された。途中
は雨中乍らとも風波なく平穩無事。俺
までが皆と一婦に禪作りに勢力を出した。而
るに午後八時次になり濃雨霧深く遂に停船
の已む無きに至る。

六月三日金、雨霧深い、乍晴る。

午前十一時次、雨霧暗れたる為、動き出す。然れ
ども約三時同ばかり碇泊中に切断した碇
の搜索に費す。なかその故無く遂に得る事
を得ざりき。然日航海、皆之矣。丹羽風取の矢

味あるのみ。

六月四日 土、晴。

昨日航海す。午後拾二時次園^ノ口着。水深の園
係にて満潮を待つ。麻雀、花札に花加咲
く。

六月五日 日、雨。

午前拾一時出勤。午後二時島尾に着。ランチ
に轉乗。四時敷、二十分位台湾より来て故鍋中
の温州丸に乗り貨客を積みて出勤。十分余
にして海軍査驗處と云ふ河上^ノに停べる小船に
着け検査を蒙る。その検査たるや人を馬鹿に
したものにて、處長ともおぼしき二十人そくの外
見のみ盡りたる好とボーイ見左様を者と三人而

6.

わそのボーイ見た様な奴が検査をし待つ向の
 三合に對し検査たるや南始に三イ秒定了入実
 に人を急つとる。附近には革命軍の兵船が
 四隻ばかり居た。船中^福建大學の教授と云ふ
 未國人と名達になりてやくし乍ら會話の練
 習をした。六時三十分福州着。先輩波田江
 文に迎へられ直ちに大和館に投宿す。こゝで
 書院を出てから四日自湯に入つて船中の汗
 とあかたを落す。好羽の風氣が安あ外悪
 化したうしく直ちに博愛病院の医者を呼
 んで診て貰ふ。大した事はないとの語を先
 づかうと安心した。波田江文の執事を承り行
 動の打ち合はせをなし十二時就寝。

六月六日 月 雨

午前八時起床。九時半より総領事館に行く。南台茗
前山にあり足晴し良し。総領事不在。夫人も待
せられ茶菓の饗宴を受け流石は外交官の妻かと
その応待振りに感ずる。次総領事帰館す。後々
調査資料を尋ね記念撮影の旨を自引き揚
げ我々教名は台湾公會學校園教師と共に同
校に行く。炒麵の所馳走になり校内參觀の後
三時出立。城内に向ふ。萬壽橋の附近よりトラリ
を改造したらしき走る電車のバスに乗る。南門
まで大洋一角。途中停留所を所。常に満員
の盛況。下車後雨は降るし丹羽は居るし附近
市中足物に止めおこしういせ。ならぬと回答

の米遂に城外の越山にある鎮海樓と云ふ高
 大なる建築物に登る事に決定場所はその高地
 なる為見晴し良く霖雨その降る福州城
 中を一望の中を下瞰する事を得建築物は千歳
 を経たりと思しく底身朽ちて落ちたる所あり
 小島多く居て宛然小島の巢の如き觀あり
 四時四十五分帰路につくや丹羽は非常に疲れ
 遂に横包車にてバスの停留所まで行くバス下
 車後も丹羽を黄包車に乗せ萬壽橋を渡
 りて大時計館直ちに入浴、浴後先輩主催
 の歓迎同窓會場嘉賓大茶館に行く珍
 味なる福州料理に舌鼓を打ち九時半散會
 十時帰宅直ちに就寝

六月七日 大雨

八時起床。七時にぬ中^に思つて日誌をつけ故郷への
又一信を書し、午後三時より調査の爲海圀の石
井氏の所に行く。而るに石井氏曰く何もこんな所
まで調査に来なくとも学校の圖書館で出来る
筈だと。如何にも誤りだも言はれど一応感^じたものの、
何となく同胞に対する誠意を欠いてゐる様に感
じられ、伝資料を見せて貰ひ重要な点を寫し
て貰ふと頼みたるに氏曰く學生を呼ばせ見せる
にその上寫す等とは絶作^になりぬときつい誤^り
だらうと重ねて今を要しし早々にして引き揚げ、
に調査はオシロし日誌に重きを置き事にし調査
は止む海岸通りを散歩し宿に歸る。夜六時

國報館長山仲文。招待に依り日本人俱樂部
 に行き、鋤燒きまつき、ビールの満を引き乍ら
 館長の漢口樂善堂時代。懷旧談並に現政
 府の對福建省の施政に關し意見存ぶ處世の所
 高見を承り、長崎縣人浦敏一氏の偉人談を
 聞き感を得ふし、終りに臨み院歌大旅行
 歌の合唱の別室にて茶菓の饗宴有り、九時
 散會す。此の日山仲館長は常に急ぎ上城
 帰なりし由。佐階下にて球を擲き十時半歸
 宅す。

六月八日水雨。

七時半起床。八時十分。雨中にわ拘らず鼓山
 登りを決行す。東三井の前よりモーターに乗

リ福建大學の少し上流の對岸ト上陸、~~勢~~勢力
 十五名競争にて登る、雨と汗とで言葉通
 リ金玉まで濡れる、十時半湧泉寺前にて
 忽ち踪影をなし喝水巖と云ふ所で握り飯
 を食ふ、喝水巖とは湧き出る清水を龍の口よ
 り吹かして水車を廻はし上にある釣リ鐘と鯉
 の突き棒で突き鳴す様面白き工夫かしてあ
 った、この湧泉寺の水は綺麗なる為福州全
 部の清水に飢えて居る者は登山して必ず満腹
 するまで飲む由。

水竹園に一杯、詰め十三時過ぎ下山、二時四十分歸
 宿、宿の主人の言に依れば湧泉寺の建方は高
 野山の建方の本なりと、登山路には一名目、二名